

仙石線 4 年 2 か月ぶり全線再開

5 月 30 日、J R 仙石線は東日本大震災以降、休止となっていた高城町（宮城県松島町）－陸前小野（東松島市）間（10.5 キロ）での運行を再開しました。あおば通（仙台市）－石巻間（49.0 キロ）の全線再開は 4 年 2 か月ぶりでした。東北線を経由して仙台－石巻間（47.2 キロ）を最短 52 分で結ぶ仙石東北ラインも開業しました。

仙石線はあおば通と石巻の 50.2 km を結ぶ JR の鉄道線路です。この路線は 2011 年 3 月 11 日の東日本大震災の津波の影響により路盤が流されるなど被害を受けました。特に被害の大きい高城町から陸前小野間のみが運休が続いていましたが、あおば通から高城町間は 2011 年 5 月 28 日に、石巻から陸前小野間は 2012 年 3 月 17 日に運転を再開していました。

再開された仙石線の上り、下りの一番列車は午前 5 時台、仙石東北ラインは午前 6 時台に各始発駅を出発します。これまで石巻から仙台までは電車と代行バス乗り換えが必要で時間もかかりましたが、利便性回復で、石巻の来訪者増が期待できます。

仙石線は震災で全線が運休したが、2012 年 3 月までに高城町－陸前小野間を除いて運転を再開していました。復旧に伴い、J R は陸前大塚（東松島市）－陸前小野間の線路と東名、野蒜両駅を内陸側に移設しました。今回開通となった高城町から陸前小野間では今後の津波対策として以前の線路から約 500m 内陸への変更が行われ、途中の東名・野蒜の 2 駅も被災者が集団移転する高台に移設され、震災前よりも 1.2 km 短縮されます。

高台に移設した野蒜駅（東松島市）では、沿線自治体の首長ら関係者約 120 人が集まり、合同の記念式典が開かれました。石巻小学校の児童らで作る鼓笛隊の演奏が行われ、鉄道ファンや開通した電車をカメラに写す人や電車に向かって手を振る人、運転再開を祝う人が訪れ、列車の到着に歓声が上がりました。

J R 東日本仙台支社によると、仙石線は 1 日上下計 195 本を運行します。このうち、あおば通－石巻の列車は上下計 38 本で、両区間を約 1 時間半でつなぎ、仙石東北ラインは特別快速と快速列車限定で、仙台－石巻間を 1 日上下計 28 本運行します。

しかし、運転再開の一方で新しいまちの形ができていないため、近隣住民は不便を強いられています。線路の内陸移転により住宅が残る元の野蒜駅付近からは約 1 キロの遠回りが必要ですし、高台の新野蒜駅は足腰の弱いお年寄りには不便など課題もあります。被災地を離れていく人が多く、震災前と比べ利用者数が減っていることも課題です。

この仙石線再開により来訪者に震災から 4 年が過ぎた復興半ばの石巻を見てもらいやすくなると思います。その意味でも仙石線再開は石巻にとって大きいことだと私（大瀧）は思いました。

仙石線再開で復興加速への期待も高まっています。課題もまだ多いのですが被災地の復興に繋がると私（湧井）は思います。一本で仙台と石巻が繋がったことによってボランティアにも参加しやすくなり、石巻などの被災地がさらに復興しやすくなったと私は感じました。

（大瀧裕也、湧井翔太）

気仙沼の祖父の被災と復興

私は 2011 年 3 月 11 日の震災があった 2 日後に、岩手県の実家から気仙沼の祖父の家に行きました。祖父はなんとか津波から逃げ切り命は助かりました。今では新しい船を買い、漁師の仕事で毎日漁にでているそうです。しかし、このまちでもたくさんの人達が犠牲となりたくさんの人たちが悲しんだはずです。絶対この悲しみを忘れてはいけません。

初めて被災地を見たときはかなりの衝撃を受けました。道路に船があったり家が原形もなくボロボロになっていたりして、かなりのショックを受けました。私の実家は料亭をやっており食料がたくさんあったので、気仙沼の人たちにその食料を提供しました。その時の人たちの笑顔を見た時、父と一緒に祖父が泣いていたことを今でも覚えています。

私の祖父の家は津波の被害はなく家が壊れずにすんだのでその家に住んでいます。この 4 年で数え切れないほどのボランティアをしたそうです。死体を見つける仕事やがれきを運ぶボランティアをたくさんしたそうです。たくさんの死体をみて頭がおかしくなりそうになった時があったそうです。

今では海に入り釣りなどをしたりする人が増えました。お店もかなり増え日に日に復興していることがわかります。被災地では地面のかさ上げ工事が進んでいますが、まだまだ完成には程遠い状況です。工事現場の人たちを見て、私もなにか復興の助けになることをしたいと思いました。

この間、被災地は昔よりいい街を作ろうと一生懸命復興活動をしてきました。気仙沼の雇用関連は安定してきており、有効求人倍率は県全体よりも高い値となっています。また、復興屋台村気仙沼横丁というのができました。居酒屋や食堂などが並びとてもにぎわっています。祖父は毎晩かよっているそうですし、今の気仙沼に増えている観光客も集まります。まちがどのように変わっているかを見に来る人たちがたくさんいます。

祖父は今でも被災直後と変わらずボランティアをしているそうです。主に、海岸清掃をしています。小泉海岸や大谷海岸などの清掃です。私も 1 回だけですがそのボランティアに参加したことがあります。とてもやりがいがある活動でした。

これからは少しでもいいからボランティアなどに参加して被災地の力になるようなことをしていきたいです。私も復興の役に立てればと心から思います。

（蒔田大介）



石巻に国立競技場の聖火台貸し出し

6月18日、東日本大震災の津波で被害を受けた石巻市南境にある市総合公園内に、1964年に東京五輪で聖火をともした国立競技場（東京）の聖火台が一時貸与されました。

地元の商工会議所やNPOなどでつくる誘致委員会から委託された業者が、運動公園への設置作業を行いました。聖火台の大きさは、直径・高さが約2.1メートル、重さ2.6トンあり、大型クレーンを使ってゆっくりと高さ2.5メートルのコンクリート製の台座に取り付けられました。

今月の27、28日に初開催される「いしのまき復興マラソン」の際に除幕式が行われ、火が灯され皆さんに披露されるそうです。2020年の東京五輪の聖火リレー出発地の同市誘致に向けての盛り上がりが期待されています。

安全や費用の面から点火設備は常設せず、イベントの際に聖火台の上にバーナーを取り付けて使用されます。火は最大で約1.5メートルの高さまで上がるそうです。

聖火台が貸与される期間は、2020年の東京五輪に向けた国立競技場の建て替えに合わせて、新国立競技場が完成される2019年3月までの予定です。

この公園内には、開成・南境両仮設住宅団地が建てられており、今も1379世帯3061人が暮らしています。石巻専修大学から徒歩数分のところ です。

この聖火台が設置されたことによって、被災した石巻市を2020年の東京五輪で聖火リレーの出発地することが出来れば、よりその時の復興状況を多くの人に理解していただけたと思います。

27日、市総合運動公園で行われた除幕式では、陸上男子ハンマー投げの室伏広治選手（40）が火をともしました。室伏選手は知名度が高いだけでなく、震災後何度も石巻に足を運んで支援活動をしてくださっていました。この除幕式も、被災地を元気づける機会になったと思います。

この聖火台が石巻に明るい灯を灯してくれることと 思います。これから石巻市全体の元気のシンボルになるのではないかと思います。

（三國翼）

石巻復興マラソン

6月27、28日、宮城県石巻市で「第一回石巻復興マラソン」（河北新報社主催）が行われました。復興マラソンは東日本大震災の被災地支援に感謝し復興状況を発信するのが狙いです。石巻の街を復興させていくことは大切なことです。さらにこういったイベントで、被災者の心を癒す、心の復興もとても大切なことだと思います。

このオープニングイベントのウォークの部が6月21日に、石巻中心部で行われました。市内外から約150人が参加し、27、28日のマラソン本番に向けて大会機運を盛り上げました。

ウォーク参加者は石ノ森漫画館発着の約7キロを約2時間かけて歩き、今の石巻の状況を見て回りました。旧北上川沿いから日和大橋、日和山を回って復興の様子を確認しました。到達した波の高さを示す標識を写真で取ったり、今年3月に閉校した門脇小学校の被災校舎を目に焼き付けたりしていました。

門脇小学校は、東日本大震災当日全校生徒300人のうち7人の犠牲者が出たところです。津波後の火災により校舎が黒ずみ、今は目隠しのための覆いを付けられています。残された校舎がどうなるかはまだ決まっていません。同校は学区内の人口が減少し、今後も人口増加が見込めないため閉校され、石巻小学校と統合されました。

石巻市の人々がよく遊んでいた渡波にある長浜も防潮堤工事のため、来年の3月まで浜辺に入ることができなくなっていました。少し前まで手が着けられていなかった所もあつという間に工事が進んでいます。これからも順調な工事の進展を願っています。

本番の復興マラソンには5部門に計約3500人がエントリーしました。27日は市総合運動公園内で2、3、5キロの各部が、28日は同公園を発着点に10キロ、ハーフの各部がいずれも午前10時に開催されました。親子連れや中学生、社会人などの多数のランナーが力走しました。雨と強風の悪条件の中でしたが、参加したランナーたちは充実感をにじませ、被災地にエールを送りました。

石巻専修大学からは女子競走部の選手6人が出場し、3種目で優勝しました。優勝者はハーフマラソン（18歳以上女子）の川崎美祈（人間学部1年）、10キロ（高校・一般49歳以下女子）の千葉悠里奈（人間学部1年）、5キロ（高校・一般49歳以下女子）の高橋七海（人間学部1年）でした。また、10キロの2位に牧野あや（経営学部1年）、5キロ2位にで漆戸雛（人間学部1年）、同4位に寺牛若菜（経営学部1年）が入賞しました（『ニュース専修』2015年7月15日）。女子競走部も頑張っています。

被災した方たちの心はまだ回復しているとは思えません。その中でも、被災地を応援してくれる暖かい方がたくさんいることが実感できたマラソンイベントとなった気がします。被災地の復興と一緒に、被災者の心も明るくなっていけたら本当の復興に近づいていけると思います。

（阿部鷹介）